

“ひと味違う”アンテナショップの誕生です!



開放感のあるガラス張りのエントランス。日本橋を舞台に、新たな長崎の情報発信の場がスタートする

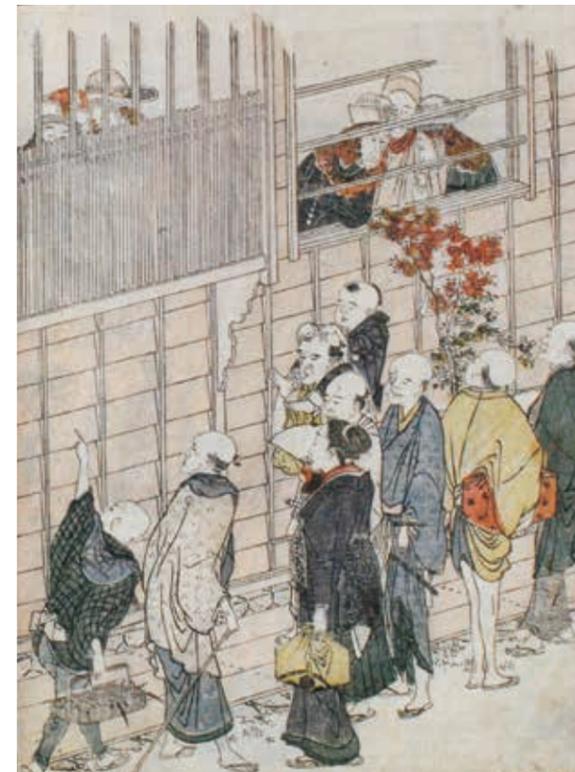
2016年~

日本橋から発信する
長崎の魅力

思えばアンテナショップとは、「地方創生」という言葉が生まれる遥か以前から、ふるさとの魅力を都心で伝えながら地方活性のきっかけをつくってきた、いわば地方創生的場づくりの先駆者ともいえる存在である。

来る3月7日に開店する「日本橋長崎館」。そもそもなぜ日本橋という場所を選んだのだろうか？江戸時代の日本橋に、長崎経由で日本に入ってくる朝鮮人参の販売をする幕府直轄の薬種問屋「長崎屋」という施設があった。別名「江戸の出島」と呼ばれたのは、オランダ商館長が江戸へ参府する際の定宿にしていたゆえん。鎖国下の日本において、外国人との交流を持つことができる貴重なサロンであり、情報発信の場でもあった。「日本橋長崎館」は、この長崎屋の精神も受け継いでいる。特産品の販売だけでなく、長崎カルチャーを発信していく店内には、さまざまな仕掛けが。食と暮らし、そして旅の案内人がそれぞれ常駐し、来館者の相談にこたえてくれるほか、イベントスペースとカフェも設けられており、長崎の文化を紹介しながら観光情報の発信も積極的に行っていく予定。かつての「長崎屋」を彷彿とさせる、新たなスタイルのアンテナショップとして注目を集めそうだ。

かつて、あの葛飾北斎もその様子を描いていました。



「画本東都遊」葛飾北斎画(中央区立郷土天文館「タイムドーム明石」所蔵)

日本橋に存在した「長崎屋」とは？

江戸時代、現在の日本橋本石町付近に実在した幕府御用達の薬種問屋。長崎屋源右衛門が代々襲名をした。オランダ商館が江戸へ参府する際の定宿としての顔も持ち、卸業としての役割と同時に文化サロンの役割も果たしていた

~**1861**年

長崎県アンテナショップ「日本橋 長崎館」Open

伝説のサロン「長崎屋」が、日本橋に蘇る!

長崎の文化・モノ・コトを伝える伝道師的な役割を果たすアンテナショップ「日本橋 長崎館」が3月7日にオープンする。単にモノを売る場所ではない、長崎らしい場づくりの背景を紹介しよう。

文=編集部 写真=吉田素子(商品) text: Discover Japan photo: Motoko Yoshida